

V09a **ALMA 最初の初期運用と東アジア地域センターのユーザー支援**

奥村幸子、齋藤正雄、西合一矢、樋口あや、谷田貝宇、小杉城治 (国立天文台)

ALMA 最初の初期科学運用が 2011 年から開始される。それに先立ち、ALMA の科学評価活動で得られた最初のテスト画像も公開され、2011 年 3 月には最初の Call for Proposal が予定されている。本講演では、それらを踏まえ、ALMA 最初の初期科学運用の概要と、それに向けた東アジア地域センターの準備状況を報告する。

ALMA プロジェクト自身は未だ建設中であり (井口他 本年会)、最初の初期科学運用は、建設・科学評価活動と並行して行われる。そのため、限られたアンテナ台数 (16 台) や受信バンド (バンド 3、6、7、9) で、評価の終了した観測モードが提供される。ALMA プロジェクトとしては、(本格運用に比べ) 限られた範囲ではあるが、初期運用をスタートさせることで、ALMA の成果をより多くの天文コミュニティに提供するとともに、できるだけ多くの観測モードや観測設定を科学運用に供することで、進行中の ALMA 観測システムの科学評価活動に効率よくフィードバックすることも目指している。一方、建設・科学評価活動と並行して行われることから、時間的・技術的な制約も存在するため、最初の科学運用は“ベストエフォート”とし、(本格運用時に想定した) データの質の保証を緩める方向で実施することが検討されている。また、並行して行われる科学評価活動の結果、科学運用に提供できる内容は常に更新されるため、最初の初期運用から次の科学運用までを (1 年より) 短くしてできるだけ提供できる内容を増やしていくことも考えられている。

本講演では、最初の初期科学運用に関する最新の情報を紹介し、東アジア地域センターで準備されるユーザー支援内容についても簡単に説明する。最初の初期運用に対応した各支援内容の詳細は、齋藤 (プロポーザル準備)、樋口 (データ解析ソフトウェア)、谷田貝 (*Portal/Helpdesk*) の講演 + ポスターを参照いただきたい。